

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年 5 月 24 日現在

機関番号：17102

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21530658

研究課題名（和文） 都市の精神分析－都市における人間－環境交流の深層心理学的解明

研究課題名（英文） Psychoanalysis of cities: A depth psychological investigation into human-environment transaction in the city.

研究代表者

南 博文（MINAMI HIROFUMI）

九州大学・人間環境学研究院・教授

研究者番号：20192362

研究成果の概要（和文）：

都市の記憶は、個人ごとにあるだけでなく、その都市の歴史を建物や道や自然景観や記念碑といった物的な対象に連合する形で留めるという共同性の次元でも存在する。都市が全体的に破壊され、あるいはある区画が消滅するという経験を経たとき、都市の記憶がどのような変遷を辿るかを、個人を対象として発展してきた精神分析の理論を基に、集合的トラウマという観点から捉え、そこで起きる抑圧作用をヒロシマおよび9/11後のニューヨークを対象に考察し、「見るなの禁止」の解除としての都市解釈の方法論を構想した。

研究成果の概要（英文）：

This research attempted to develop a depth-psychological approach and methodology to investigate into the unconscious dimension in the human-environment transactions as exemplified in the massive traumatic events where the memories of the event are not only held by individuals but also in the collective form of physical environments such as buildings, streets, natural landscapes and memorials. The traumatic experiences both at the individual and collective levels are understood by utilizing psychoanalytic concepts with the focus on the longitudinal changes in the memories and physical traces in the form of city's spatial make up as exemplified in the two cases of Hiroshima and New York after 9/11. The psychoanalysis of cities in these attempts is understood as the interpretive action toward releasing of the repressive mode of "Prohibition of Don't Look" and gradual regaining of playful transaction.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,600,000	480,000	2,080,000
2010年度	1,700,000	510,000	2,210,000
2011年度	100,000	30,000	130,000
年度			
年度			
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：社会心理学

科研費の分科・細目：心理学

キーワード：都市の精神分析・遊歩・人間－環境交流・自由連想・幻想・フィジオグノミー・見るなの禁止

1. 研究開始当初の背景

20世紀の人文社会科学の革新にフロイトの精神分析が果たした功績についてはあらためて述べるまでもないが、この学問が生まれた環境として19世紀末から20世紀初頭にかけてのウィーンという都市の置かれた社会文化的時代状況が、学の構成そのものに内在的に関与している可能性が指摘されている(ベッテルハイム, 1990)。爛熟期のウィーンの都市文化が一方で人間の欲望の発露が集約される社会空間であり、同時に崩壊しつつある時代と旧体制という状況から来る退廃性を持ったトポス(場所)であった事が、人間の欲動と無意識という心の作用への学問的な探求を試みるのにふさわしいフィールドを背景として提供していたと考えられる。

フロイトが『夢の解釈』を発表した1900年と比して、われわれが生きる20世紀から21世紀にかけての画期に、日本において「地下鉄サリン事件」による都市テロリズムの実行や阪神淡路大震災における近代的な大都市の構造的な崩落の光景と、ニューヨークの9/11での国際的テロリズムによる世界貿易センターの破壊の光景がメディアを通じて世界中に流布した事は、象徴的であると考えられる。それまで何となく都市に住んでいて「大丈夫である」という漠然とした前提-無意識-の下に都市生活を営み、経済発展の恩恵に浴してきた。都市に住む事は、不気味であるという時代の空気は、上述した事件の勃発に端を発して、「安心・安全」への過度な、あるいは神経質的な傾斜となってセキュリティによって固められる防塞的な都市空間を要求しつつある。

このような時代背景から、今あらためて都市とはどのような場所なのか、そこに住むとはどのような事なのか、近代都市計画がよって立ってきた合理性の背後に、都市という社会文化的な生活世界が持つ、非合理的な側面、あるいは日常意識から隠れた「都市の無意識」を学際的に探求していく必要があるのではないか。

近代的な都市計画は、意識的で「計画的」な問題把握を根拠として組み立てられるが、「都市に人が住まう」という現象に内在する非合理的で、複雑さ(コンプレックス)に満ちた、都市の深層心理を取り扱う「都市臨床」のアプローチをもう一方で立てる必要があると考え、都市をクライアントとしてその歴史記的形成過程を、都市との相互浸透的交流の中で解釈していく「都市の精神分析」を試みる。

2. 研究の目的

都市現象への臨床的アプローチの具体化にあたって、ベンヤミン, W. (1982) の『パサージュ論』で展開された(1)「都市が見る夢」の概念、(2)「遊歩」という方法による都市の幻想領域(ファンタスマゴリー)への接近、(3)時代の原風景としての都市建造物の成立、(4)通過する(パサージュ)相互浸透的空間としての都市街路、という概念構成を基礎に、都市現象への解釈学的アプローチを試みる。ベンヤミン(1982)では、19世紀の首都としてのパリに建造され、当時において既に衰退の経路をたどりつつあったガラスと鉄による新しい建造空間であるパサージュについて記された、膨大な引用と博物誌的な関心からのカテゴリー分類とが基礎作業としてなされ、当時の都市市民に新たな消費活動として現れた「遊歩」という行動様式や、パサージュに展開する幻想的な展示空間の持つパノラマ世界が、その時代が未来に対して見る夢を表徴するという解釈を行っている。彼の認識論には、マルクスの唯物弁証法とフロイトの精神分析からの影響がある事がうかがわれ(Buck-Morss, 1999)、現代の社会理論としての批判理論(Habermas, 1981, 1985)の系譜に位置づける事が可能と思われる。このような位置づけによって、文芸批評としてのベンヤミンの仕事を、都市の具体的な現象を対象とし、フィールドとする人文社会科学の土俵に乗せる事ができると考える。都市の精神分析が取り扱う問題領域とそれへの方法論的な課題は、次のように整理される。

(1)「都市が見る夢」という概念を、現実の都市空間に現れる夢様の体験様式として、具体的な場所や現象に則して捉え直す事。その際に、都市での遊びや、界限性、幼児期体験、表と裏など、精神分析理論と親和性のある中間概念を用いて、都市の現実様相を記述する概念体系を探りあてる。

(2)「遊歩」を、都市フィールドワークの方法として捉え直す事。ベンヤミンにおける遊歩とは、都市に出現した商品が幻想的に置かれる消費空間としてのパサージュを徘徊する新しい消費者の様式(モード)を示す概念であった。精神分析における自由連想の方法をここに媒介する事で、都市環境のあれこれに「平等に漂う注意」の赴くままに揺れ動いていく自由連想的な関わりの様態として、遊歩のフィールドワークを位置づけ、その方法論的な洗練を図る。

(3) 都市における記念碑的な建造物（メモリアル）を、都市の記憶の貯蔵庫、外化した象徴対象、物的痕跡など、都市住民の象徴化作用の産出として捉え直す事。具体的な主題としては、ヒロシマの平和記念碑、原爆ドーム、平和公園などの建造物と空間、ニューヨークの世界貿易センター跡地、における建造を巡る人々の葛藤とその収束の過程を追跡する事で、建築という行為における象徴作用を、都市の記念碑および都市のアイデンティティとの関係で理解していく、都市の臨床心理学の方向を探る。

(4) 都市における無意識が現象化する空間としての都市街路（ストリート）の生態を写し取る方法を探る事。具体的には、ベンヤミン（1931）が「光学的無意識」と呼んだ写真による都市光景の定着や、モンタージュの手法、動画による記録、スケッチ法、エスノグラフィー、あるいはシュールレアリズムにおいて用いられた自動書記（Breton, A. (1928) の”Nadja”に見られる）など、表現手段を変えた都市描写の方法とその効果を検討し、精神分析における顕在夢の言語記録に相当する都市の無意識の記録方法を吟味する。

3. 研究の方法

都市の精神分析の方法論的な基礎作業を進めるにあたって、研究課題として挙げた4つの主題を実現するために、次のようなまとめりで研究を行う。

(1) 都市の無意識に関する文献研究

精神分析学、都市論、都市社会学、建築学、文芸評論などのジャンルにおいて、都市の無意識とその解説に関わると考えられる文献を収集し、現在まで提示されている諸見解の概要を整理する。

(2) 「遊歩」概念から見たフィールドワーク論の展開

都市のフィールドワークの手法としてベンヤミン, W.の遊歩の概念を敷衍し、さらにそれらを精神分析における遊びの理論、移行現象の理論との対話によって、分析の方法としての基礎づけを行う。

(3) 都市臨床の事例としてのヒロシマおよびニューヨークの分析的研究

都市が全体として受けたトラウマの事例としてヒロシマとニューヨークを取り上げ、前者では60年以上の時間経過によって生じる記憶痕跡の変容と記念碑的空間の創出に関わる集団心理を、後者では現在進行しつつある対象喪失と空間創出の過程を、それぞれ現地調査に基づいてフィールドワー

クし、都市への臨床的接近の実践的検証を行う。

4. 研究成果

都市の精神分析の理論的な組立と「遊歩」と自由連想を鍵とする方法論の確立が、本研究の主要課題であった。その際に環境心理学を専門とする研究者と精神分析を専門とする研究者との相互作用と、両者による都市フィールドでの分析的（自由連想的）体験の共有を基に、このアプローチの妥当性を検証する事が試みられた。理論化はまだ進行中であるが、現在理解された事の要点を下記にまとめる。

(1) 理論研究… 都市の精神分析の基礎概念として、ベンヤミンの「都市のみる夢」の概念を基にしながら、商品が陳列・提示される空間としてのストリート、都市の空間構造としての地上と地下との階層の存在と地下空間における不安の隠ぺい、ベンヤミンの読解したポーの小説における「探偵」的な人間関係と都市のカフェなどにおける「その場限りの接触」の持つ心地よさ（群衆の中に隠れるという居方）、都市における物質性の現れとしての鉄の構造物が持つ深層イメージ、それらが構成する地下鉄の空間性、などの人間-環境交流のいくつかの特徴的なaspect（側面）を、遊歩的モードによる都市環境の現れとして捉える理論的視点を整理した。

また、都市の精神分析への準備的な試行として地下鉄車中を分析室になぞられた「毎日分析」において得られた夢イメージの描出と、そこで展開する自由連想を、「自己表出」および「指示表出」という吉本隆明の言語論を用いて、自己幻想と共同幻想の観点から整理した。さらに、夢において構成される像（イメージ）の描出を「夢の描像理論」として整理し、フロイトの精神分析における事例（ドラの事例）との対応を行なった。

以上の理論的考察は、パサージュを都市のみる夢の現出する空間であると捉えたベンヤミンの洞察を、現在の都市空間での体験と接続する概念的な媒介を提供する。

(2) 都市との分析的セッションとしての遊歩のフィールドワークの方法論的検討… 都市をクライアントとする都市臨床の概念の下に、ベンヤミンの「遊歩」概念をフィールドワークとして実践する方法論的検討を行なった。その際に、都市の路地を自由連想的に歩き回る体験において観取されるさまざまな街頭風景、をベンヤミンの用語における

「ファンタスマゴリー（幻灯的な映像・ビジョン）」として記述する都市の「肖像」を、フィジオグノミー（表情的・力動的様相）の描出という観点からもたらす連想について、記述した。遊歩モードにある都市体験者にとっては、「もの」は表情的な「アウラ」をもって現れ、それが欲望を喚起し、その「もの」の背後にある実現しなかった夢、古びた新しさが深層的に観取される。

また夢における環境体験の記述から夢における空間性（左右や高さなど）が身体軸に基づくこと、環境における過去に遭遇した場所のイメージがモンタージュ的に合成されていること、写真撮影における対象との遭遇が、偶有的で意味理解は、撮影後に行われる解釈によって遡及的に構成されること（「解釈の産婆術」と名づけた）などの力動が明らかになり、遊歩による環境移動が、精神分析における自由連想と等価な心理学的属性を持つものである事が理解された。

（3）広島とニューヨークの臨床観察…

平成21年度に予定されていたニューヨークでのフィールドワーク及び研究打ち合わせの実施について現地の相手先（ニューヨーク市立大学）の都合により、平成22年度に延期されたため「繰越し申請」を行なった。

平成22年度に同上の研究を遂行するため、平成23年3月25日より同3月31日の期間、ニューヨーク市における都市フィールドワークを行い、ニューヨーク市立大学大学院センター及びコロンビア大学精神医学部地域精神医療分野との研究協議を実施した。なお、研究分担者の北山修も同上の海外フィールドワークに参加の予定であったが、東北大地震による波及のため出張は取りやめとなった。北山の研究内容については、研究代表者の南より同上の研究機関での代読を行い、協議は実施した。

以上の繰越し申請による海外出張及び文献調査によって、都市の大規模被災の経験を相互に比較考察する方法としての精神分析の概念枠組みが有効であることが明らかになり、本研究の理論的な構想について、国際的な観点からの批判的検証を行なう事が出来た。これらの国際的な協議の場で同時期に日本の東日本大震災の話題が取り上げられることとなり、アメリカ合衆国のニューオリンズにおけるカタリーナ・ハリケーンによる都市の浸水とその後水面下の土地に居住し続けたい住民の問題（合理的な理由だけではない、土地への愛着）、第2

次世界大戦後のワルシャワ市の復興過程で、戦災前と同じ建物とその配列を再建する事へ市民が固執した事例などが取り上げられ、広島の場合との比較考察がなされた。これらの議論は、都市をクライアントとしての精神分析的解釈と臨床的な関与が可能である事を示唆しており、今後の研究展開に寄与するところが大きであった。

さらに広島とニューヨーク両都市での遊歩的なフィールドワークと写真撮影および写真集などの収集を通じた、都市の描像の解析を行い、同時に都市レベルでの記憶と集成的な表象としての記念碑および再開発のプロセスにおける記憶の消去とその回復の過程を分析する枠組みを、これらの描像の解釈と共に行なう都市臨床の基本的手法を開発した。都市の大規模被災の「現地」の痕跡を、都市の記憶という面から捉える視点と、その場所が再興されていく過程で過去の記憶痕跡が消去される心理力動が都市臨床の課題として理解され、上述の方法による「解釈」の妥当性が吟味された。

平成24年12月に実施された共同研究者である南と北山とのニューヨーク市における共同フィールドワークにおいて、都市遊歩の体験について、精神分析の理論的な意味と、広島および福島での被災体験との関連、そこにおいて現出する「見るな禁止」の作用と、そこからの今後の可能性について議論した事で、都市研究における精神分析の適用に向けた成果が得られた。また、平成21年～22年の広島市の平和記念式典に関するフィールドワークと対比する形で長崎市における平和記念式を参加観察して、幼児期における環境体験のない場合での場所への連想の展開が原風景形成とどのように関係するかの考察を行なった。

上記の臨床観察を通して明らかになった事は、遊歩という言葉に表現されるように都市において「遊ぶ」事がどのように可能かが都市の創造性にとって鍵を握っており、広島市の平和慰霊祭に象徴される厳粛さ・真面目さにある遊びのなさは、「あの日」の記憶が原光景的な圧倒的な出来事として直接体験者のみならずその後の都市住民にとって抑圧的な作用をもたらしている可能性があること、原光景に対する「見るな禁止」を解除し、出来事の記憶を昇華する文化装置としての祭りなどの共同想起の方法を「記念の作業」と位置づけることで都市の再生を図る道を探ること、が都市の精神分析の臨床的な適用であるという理解であった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

- ① 南 博文、EDRA 体験 (Experiencing EDRA)、MERA Journal (人間・環境学会誌)、査読無、14巻、2011、51-52

[学会発表] (計2件)

- ① 南 博文、環境と発達の交差点 (シンポジウム「発達心理学と質的心理学のクロスロード」)、日本発達心理学会第23回大会、2012年3月10日、名古屋国際会議場 (愛知)
- ② 南 博文、路地の記憶/路地の消失 (シンポジウム「不在のコミュニケーション—その後」)、日本質的心理学会第8回大会、2011年11月27日、安田女子大学 (広島)

[図書] (計2件)

- ① 南 博文、ミネルヴァ書房、人間環境心理学の理論と実践—認知論とその後 (深田博己 (監修)「教育・発達心理学—心理学研究の新世紀3」)、2012、313-334
- ② 南 博文、新曜社、環境移行とライフサイクル (氏家達夫・遠藤利彦 (編著)「社会・文化に生きる人間—発達科学ハンドブック5」)、2012、135-147

6. 研究組織

(1) 研究代表者

南 博文 (MINAMI HIROFUMI)

九州大学・大学院人間環境学研究院・教授
研究者番号：20192362

(2) 研究分担者

北山 修 (KITAYAMA OSAMU)

九州大学・大学院人間環境学研究院・名誉教授

研究者番号：80243856

(3) 連携研究者

なし ()

研究者番号：